

東京路上生活マニユアル

こうのかいじ
河野開司

路上生活というと世間一般のイメージでは果てしなく辛く厳しい毎日と思われがちである。しかし、勤め人や学生にはない自由があることもまた事実である。こう言う私も東京（主に新宿）で10年近くも路上生活をしてきたが、意外となんとかなってしまふ不思議さと面白さがあり、時と場合によっては冒険心を掻き立てられる事もしばしばあった。そんな私のこれまでの体験してきた路上生活から生み出された東京での路上生活をより快適に過ごすための東京路上生活マニユアルをここでお伝えする。

毎朝、午前4時20分になると新宿駅西口地下広場には場内アナウンス放送が響きわたる。「東京都第三建設事務所と新宿警察署より警告します。この地下広場は多くの都民が利用する大切な公共施設です。ここにダンボールなどを置いて寝起きをしたり、煮炊きをしたり、許可なく物品の販売をすることは道路法および道路路交通法で禁止されています。ただちにやめて片付けて下さい。皆様のご理解とご協力をお願い致します。」

私は毎朝この放送を聞いているうちに、いつの間にかその放送の一言一句を全て覚え込んでしまった。一晚（23時〜翌朝4時20分）その地下広場で野宿をすることが日課となっていた私は、その放送を耳にするとすぐに起床して東京メトロの暖かな地下通路へと移動する。そこでなら午前7時10分くらいまで寝ることができるからだ。これが私の、いや新宿構内で野宿をする者たちの睡眠スケジュールなのである。時間になるたびにいちいち起きて移動することに最初はしんどく感じたが、慣れてくると睡眠はきちんと取れて目覚め具合もいいから不思議である。

そもそも私がプロのホームレスとして路上生活デビューをしたのは2002年の8月下旬頃で、舞台は新宿からのスタートとなった。当時私は27歳であった。様々な事情が重なってホームレスとなってしまったわけだが、まさか東京がホームレスにとってこんなに過ごしやすい生活環境が整っているなんて夢にも思っていなかったし、故郷の広島県にいたときには

「東京に行けば（東京で暮らせば）なんとかなるなんて大間違い。東京はそんなに甘いところではない。」

と、両親からもよく言われていたし、テレビや週刊誌などでもそのように報道されている。

確かに東京で暮らし始めたからといっていきなり仕事で成功を納め、優雅な生活が送れるようになることはまずあり得ない。そうなるためには秀でた才能と地道な努力と運が必要とされる。しかし、ホームレスとして生活するのであれば東京にいと意外と衣食面ではなんとかなってしまいうことが多く、都内の特定の野宿スポットを把握していれば夜の寝場所に困ることがない。私はホームレスデビュー以来、ずっと新宿駅西口地下広場を寝場所としていた。渋谷区役所地下駐車場でも野宿できるといふ情報もキャッチしているのだが、今さら不慣れな場所に移る気分にはなれなかった。野宿で最も辛いのは冬場での野宿である。冬の寒い中での野宿というのは春夏秋冬に比べたら寒さのあまりにまともに熟睡ができない。こうなった場合、数百円ほどのお金を持っているのであれば深夜も営業しているファーストフード店やファミレスでコーヒーを飲みながら明け方まで泊まり込むという方法もあるが、毎晩そんなことをしていたら所持金がなくなってしまうので、毛布か寝袋にくるまって寝るのが良い。私はボランティア団体からは毛布を、キリスト教会からは寝袋をいただいたが、どちらも寒さをしのげてきちんと熟睡ができることをこの身で実感することができた。そう、この時点で睡眠面をなんとか無事に乗り切れたのである。もし、ここがホームレスの多い東京ではなく地方の片田舎だったら毛布や寝袋の配布に出逢うことなく凍死していたかもしれない。東京ならではこそなんとかなったのだ。

人間たるもの睡眠も大事だが、毎日生きていく上では食事をしなくてはならない。さて、収入のないホームレスがどうやって食事にありつくかが問題である。私もホームレスデビューをした頃の頃は、都内で行われている炊き出しの存在を知らず、飢えをしのぐための具体的な方法をなかなか見つけられずにいた。とりあえず、最初に実行したことはデパ地下の食料品売場の試食品をつまむことくらいだった。私はこれだけで1週間生き抜いた記憶があるが、食べられるのはほんの少量で腹の足しにはならなかった。次に都内の献血ルームで献血をして、そのルーム内にあるお菓子を食べて飢えをしのぐことを覚えたが、献血というのは毎日できるわけではなく、成分献血でさえ2週間に1回しかできないようになっていた。なので、この方法は毎日使えない。そうしているうちに新宿区役所でカンパンを貰うことを覚え、ボランティア団体による公演での炊き出しやキリスト教会による教会での食事を知ることとなる。日が経つにつれて私は都内の炊き出しの曜日・時間・場所をどんどん増やしていった。炊き出しというのは主に新宿・渋谷・上野方面で行われていることが多く、それらを全部ノートにまとめてみると、1日でこんなに食べ切れるのだろうか思ってしまうほどの莫大な数であった。これでまた東京にいれば食事面でもなんとか

なることが証明された。私なんかその炊き出しを食べ過ぎて太ってしまったくらいである。

しかし、ただ単にお腹いっぱい食事できればいいというわけではない。人間は睡眠・食事の他に体を清潔に保たなくてはならないものである。さて、路上生活をしていて収入がなくても東京にさえいれば風呂や衣類の洗濯をなんとかすることができのだろうか？ そう、いとも簡単にできてしまうのである。毎週月曜〜金曜に新宿区役所第二分庁舎に行くところシャワーを浴びさせてもらえ、衣類の洗濯もさせてもらえる。着替えが欲しい場合は、毎週日曜日の夕方に新宿中央公園のナイアガラの滝の前でボランティア団体が衣類の配布をしているので、そこから自分の必要な衣類を貰えば事足りるのである。また、髪が伸びた場合についてはキリスト教会での炊き出しのときに切ってもらおうのが主流なのだが、ホームレス全員がそうしているとは限らない。他のホームレスたちがどこで髪を切っているのかは知らないが、私は美容室のカットモデルを利用している。カットモデルとは新人美容師のカットの練習台になる代わりに無料で髪を切ってもらえることである。3カ月に1回の割合で新宿の某美容室にカットモデルの申し込みをしに行って無料でカットとシャンプーをしてもらっているのだが、その最中こそまさに至福のひとときであると言える。このように、東京にいれば衣服や衛生面でもなんとかすることができるのである。

ここまでの路上生活マニュアルを熟知しているだけでも衣食や寝場所に困ることはないだろうが、それだけではまだ健康で文化的な路上生活を営むことは難しい。そのうち歯磨きセットや靴下といったどうしてもお金を払って購入しないといけない生活用品が必ず出てくるものである。しかし、東京にいれば路上生活をしていてもお金を稼ぐことは十分可能なのである。こう言うとホームレスができる仕事といえば、アルミ缶拾いや雑誌集めなんかを思い浮かべてしまうのだろうか、それだと1日千〜2千円くらいしか稼げないので、私は長年の路上生活の中から四苦八苦しながら全く別の手段で稼ぐ方法を見つけ出した。私の主なしわざ（お金儲けの手段）は交通量調査で、これだと12時間調査で日給1万円、24時間調査だと日給2万円にもなる。調査員の募集はアルバイト雑誌の短期バイト欄に載っているのだが、給料は日払いで手軽に稼げる人気バイトのため募集広告を見つけたら早く応募してしまわないと、すぐに募集定員に達してしまい応募の受け付けを締め切られてしまうという競争率の高さである。交通量調査が実施される主な時期は2月・6月・10月・11月で、それ以外の時期にやることといえば治験ボランティア（製薬会社で開発中の医薬品を健康な人に使用してもらい、血液や尿の検査値データを収集して有効性や安全性を確

認する試験の被験者）や人材派遣会社に登録をして日雇いの肉体労働くらいである。また、池袋・新宿・渋谷などの街頭で行われているアンケートモニターに参加して5百〜千円分の図書カードや商品券を貰い、それを近くの金券ショップで換金して小銭を得るという方法もある。ただし、年中いつでもこれらの仕事やアンケートなどがあるわけではないので、何もやることがない日々が続くと所持金はどんどん減っていき、経済状態が苦しくなるというリスクも伴っているのである。それでも、何だかんだと言っても結局は東京にいれば経済面においてもなんとかしてしまいうことができるのだ。

こんな路上生活を自ら楽しんでしまう私も時折ハローワークに行っては真面目まじめに就職活動をしている。しかし、何社応募してみてもどこの企業も私を採用してくれない。やはり、企業側が重視しているのは仕事に対するやる気よりも経験の有無であるようだ。このように未経験者にはチャンスすら与えられないという深刻な雇用情勢がこれからもずっと続いて私の路上生活が長引くほど、東京路上生活マニュアルはさらに改良を重ねていき、ますます進化を遂げることとなりそうだ。